

新門 辰五郎 游俠 譚

梅星翁七彦綴
一梅齋芳春畫

初編

文永堂
聚榮堂
合梓



松子





新門
辰五郎
游俠譚

生田芳春再

上卷

元田彫長

梅星父耶綴

A466
1

48-8163

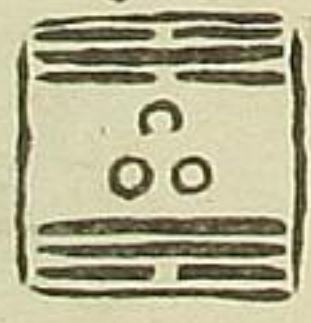
新門辰五郎游俠譚等初編序
 韓非俠と擯け司馬遷俠と傳し。班固俠と惡む各その意
 の得不得の之。俠は世に稱せらる。西洋も亦之有り。彼の民権を主
 張して政府を抗して死を忘る者。漢に所謂游俠にそ。我國の男
 達多。恁れば世畧中孰の洲より。俠客の元ら非ず。實は陰
 囊有る者の行るふべき道みこと。余れば男でんせんとハ。儀
 平。詞のこれ。事小臨みて不遠巡る男の中乃男一匹ある
 べ。蓋しが大皇國ハ東方の陽氣盛んると。自然ら俠客多
 り。別て方今世の人の耳目に觸る新門の新奇殊説
 美事勇談の履歴を刊行做さす計。大川島の函書

肆。至急の注文。承諾。即座に筆をとりて啼く東のくま
 と翌二日僅る日限の急案急稿。余れども猥に傳記に難
 り。現在に其子孫且由縁の人も。慙うぬ。風を追ひ影を捕ふ。
 附會の説。作らさね。繪草紙と云ふ。正説實録當時
 その名も辰五郎が。表壽の齡を保ち。一世俠氣の行状を。
 新門の粗畧ある。細密に綴る。緒を解き分ち。筆
 談肇談

明治十二年第四月穀雨後第五日の午後

昔の梅暮里谷城今の

乙彦志るに





金藏院の粉名岩

ふけの僧 普化の 姓名の 未詳の あり



新門の頭辰五郎

芳春画

櫛屋の阿祿

新甲

つとていともたぐ

彼の者へ

怒りの

聲を

立て

何で已と

撞くと

此様ふ

怪我をさせこの

此分で済さぬ(ぞと

逆ねぢとばみ呆れろ若りの後ろより

合むりたるへ一人兩人づくと進
寄りあんど此野郎も撞ととこれて
けぞとことそれじかアめめへの
面が立ちサア友達の意趣
がア野郎一番どう
ちめろとめめ
より早く着
もの襟がま
無子とどろろ
うそ一個の
前より肩
ぐらととろて
忽地押しませ右へ



童心
よも
主が
手で
こみ
遇と
見て
二年
涙と堪
怒り
さ
ぞの
次へ

左へ傍若無人の暴所為みおどろ

る思ろ若りの何とよ

無子よそのひれさかの

瘦腕一支へ

難

の打擲

そりや喧嘩

ごと往來

の人ごどと

逃ちる

中よ

供の

丁推へ

浅き海

金あさ

新と水

山もろ

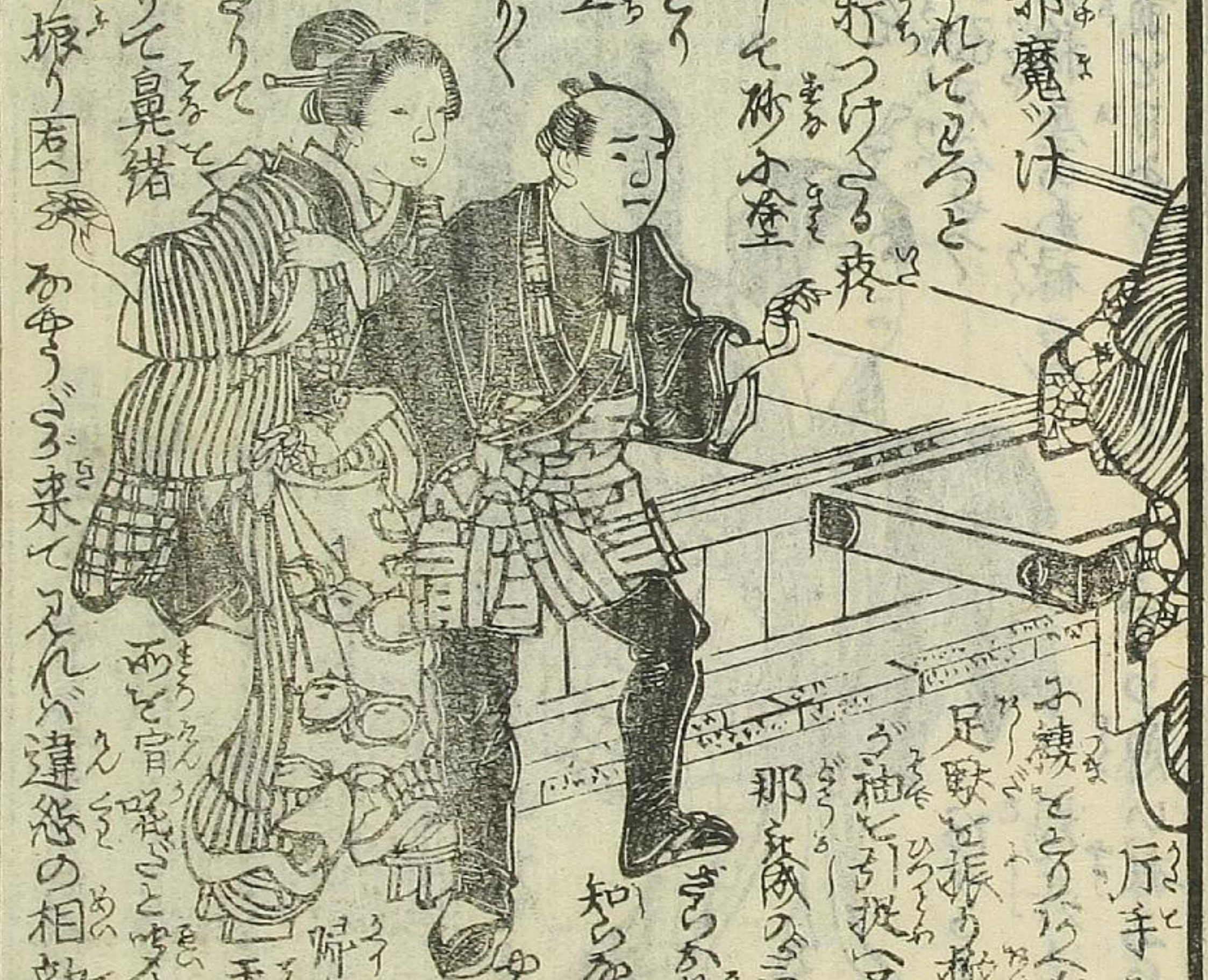
つらうち
忘れて
一個の



左の扱て若者の既
打んとする西馬道
口ふ集合る諸
の後

ろより 押し分て走り
寄る婢婿る一個の
娘髪飾り美
麗み素白の愛
嬌妖艶る湯帰
るる一濡手也
ひ村木炭ふ糠
袋と束ふと

一人が後ろより一生
懸命とあがき汁とぞ邪魔ツけ
る童僕奴と蹴仆これとらと
泣出し大地ふ天願を打つけける疼
さを堪へて起りたり落しとゆふ堂
れとるうらうらと色とと
あげく何思ひえん群立
とる人の油の下を滑り
押分はく並水の方へ逃
去りたりとるいとく
鳴りたりと夜突つたりと
外れりる人の立ちたりと鼻緒
の筋一足駄とるのとる娘(右)
かやううう来てくれんが違恋の相敵の(次)



斤手お持走り
子懐とるらんを今彼の
足駄と振り振るる人
が油と引扱(右)か持よ
那を敵のこえんれん
ざらか前も
知らぬ頼てる忽
かやううう来てくれんが違恋の相敵の(次)

此か人の妻う大の旦那
那の理由あらるる往來中をらり

しんるるを成を
ふこととえんがらるる上



下とあら
旦那
柄へあら
申せうら
あまへんも
一野よあむとら
三個のりるもの等い面合せつ
もとめめか前の稲屋のか縁え
己達か前の見世前と日かどど

かめ人ふあつらりけり
しんれと縁へらりあを領

しんれと妻の花主逃由
しんれと妻の花主逃由



あつらりけり
しんれと妻の花主逃由
あつらりけり
しんれと妻の花主逃由

理條



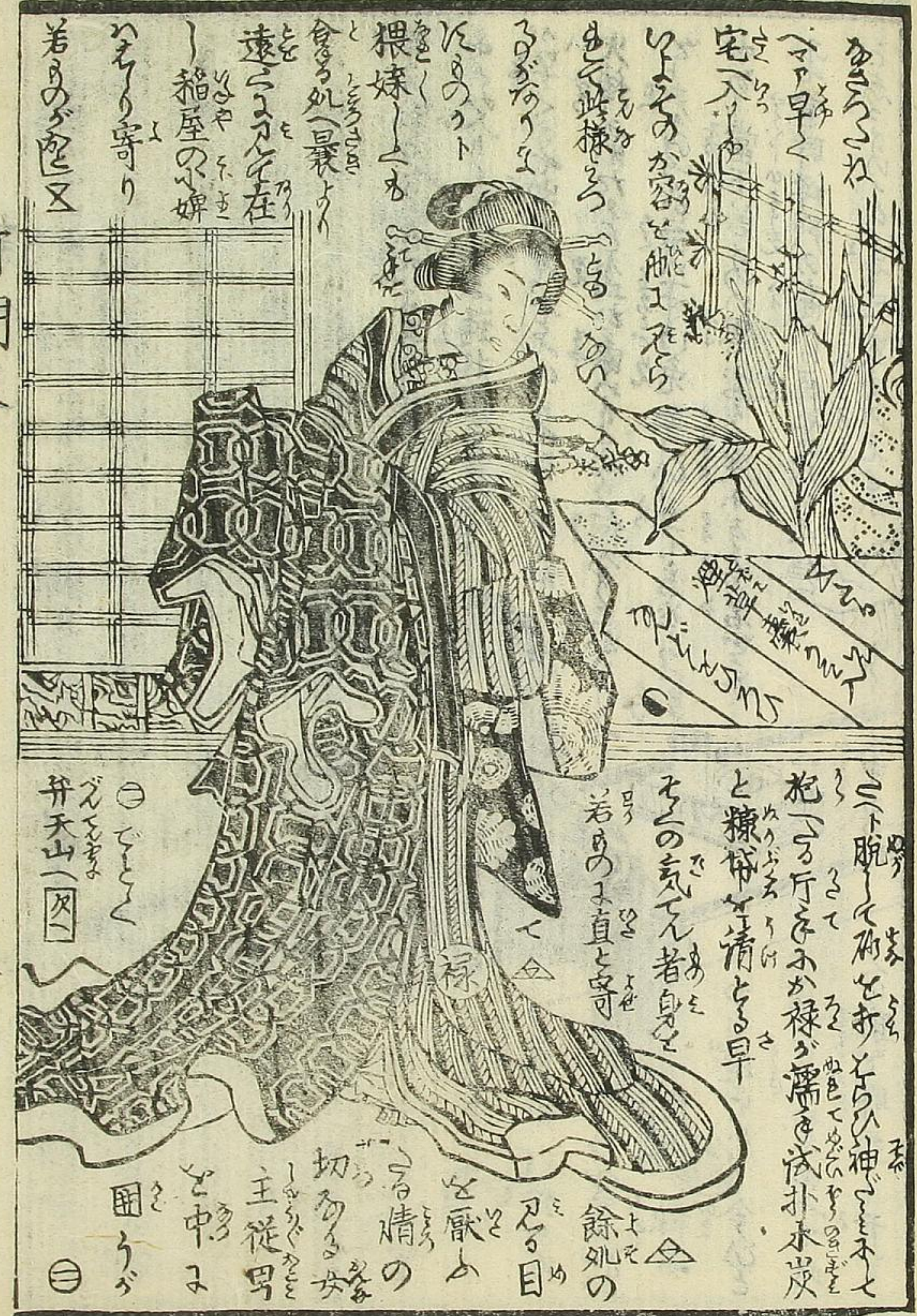
通るれどつらぞえん
いか前の旦那いひぶんがられ
斯し仕宜すも成
うら来い
いふあら
行も仕
今あら
都合
うらら
うらら
あや、後小
末らゆを然い
縁由れり此人へ

人立の中、紛れて立去り



思ひひけるは愛難とありゆきかきとせしむる彼の
 着のへ起るなりて汚れ 衣服の去と拂とけは祿おぬ
 會都て
 そともいらぬ
 貴嬢のお助け
 いあそちう
 目であら
 まは祿の笑
 と含まつ
 那の間
 遠ひてあり
 ばら飛
 めが遇

下脱く物をおそりひ神てそと
 花一万斤をか祿を濡るは朴水炭
 と糠掃を清とる早
 そのええ者身と
 若のよ直と寄
 餘丸の
 忍る目
 を厭ふ
 情の
 切なる女
 主従男
 と中
 困うが



あつたね
 早
 宅入
 ひとそのか容と能とそら
 もと此様と
 りがなり
 人のコト
 根妹ととも
 食丸(最)
 遠くかた在
 稲屋の婢
 けりり寄り
 若のが空又

てしこ
 井天山(又)



中卷



新門
石五三

遊俠譚

初編中

新門著

一編多量

衆栄

文永

合梓



上のつゝは 縁へもれも膝をきりて那の人をもち
 妾ふ判して無法なといふのをききんら大い
 おけがもか有るさうらむお愛へかきし
 めのそこのの妾の口うら旦那
 どのを申しつて
 ことば外穿ても
 多うさうさう貴君
 此難儀が脱きても又此迷心で
 か有るさうさう然しなかいと那の人
 ところが攘ひされません由も是も此の
 ちさららて在ッぬい服えは宅うらち取よせ
 みありをさう但し一直とか駕籠ふり
 か帰らなかりまはし何ても礼をこか髪

又破まを汚れと云彼をいふ都
 合とぞんトまはしうら髪結て呼
 子遣りまはし上服へ
 お脱あつてか気
 味
 温袍
 一寸さう
 て在ッぬい
 縁
 次へ



新門

つぎ 吩咐しつゝ久し小婢がいと申せぬ
當番つなぎの漆袖小髷いろ緒
の奥裏へ黒ひろどのありて

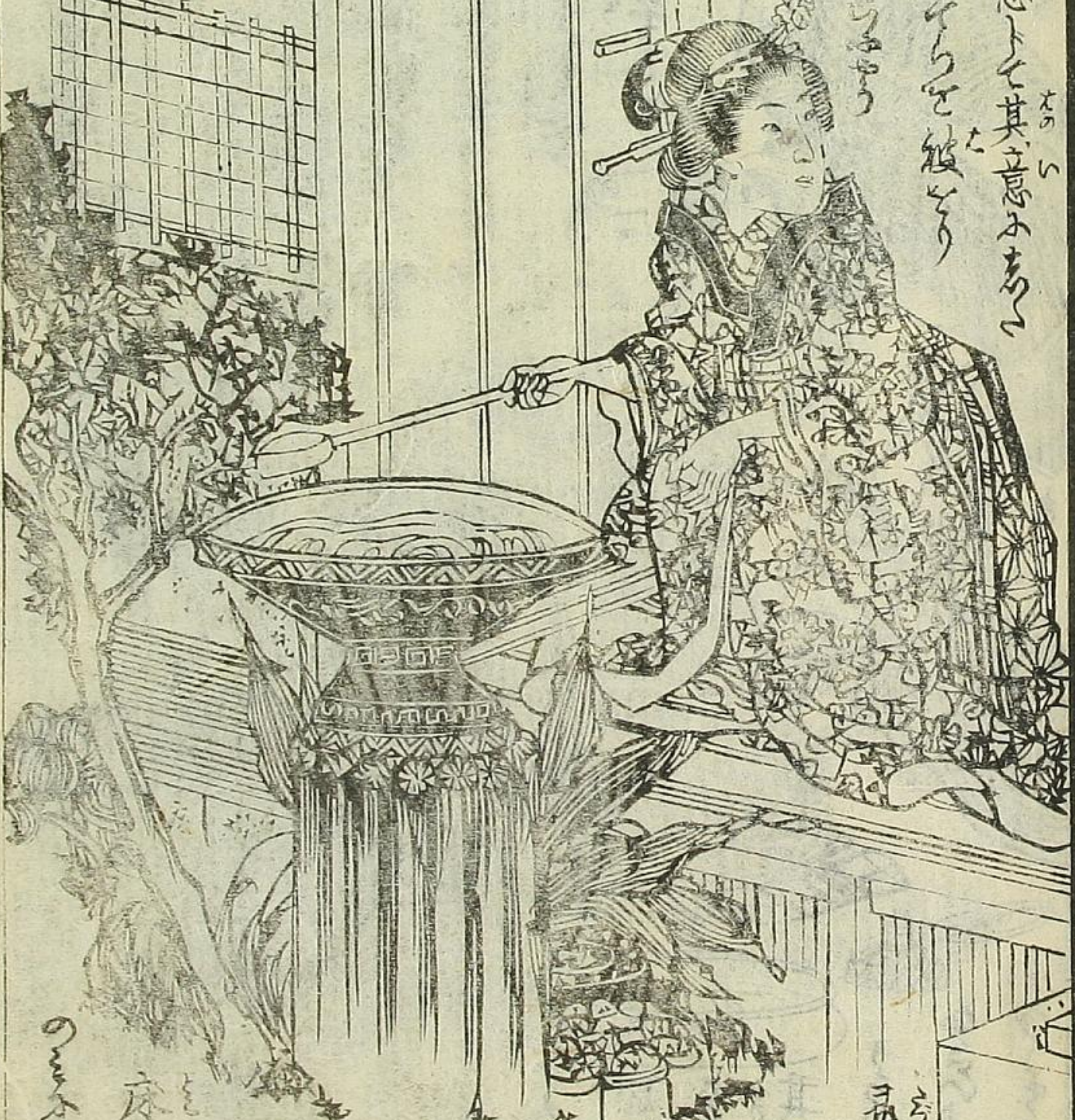


通ぬ女
か禄へ合せて
うらひろびつゝ若めの後へ
まのてサアアアをせりはト莞
承早の盛岡の發嬌想ひる身由
戦栗とさる若りのへおすそふをるこころをイ
然と被るもさちら且那態いおむ亦初心らト下をま
野まのさきこれおつひ無ののら又おろが艶麗才

此方お朝
と在とい
あらぞ迎ひ
の者ぶとあり
かてこよ
成て存る
計人の
許をを
あらせと遣
らふといひをた
ら便を頼んぞ
さのいふまゝに
敢て料紙現を
さゆせ折らふ小
トよと降り来
場
の
髪
結

智をあらり小感とて其意みま
び上服をぬきとらを被る

居りおやとまじり
私日本橋の
角屋又左門
の序さ久次お
とりま者先刻
こころが
あけ
おのこころ
あらぬ
大らこあら
せま七合



えい
い
當
が
志
れ
え
ん
せ
ら
ん
床
の
ま
か

氣の異なる理由

ありては、ア、ト、の、を、き、て

お玉の氣を

報らち

左様



苦勞を、ア、ト、の、を、き、て

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

一室のみ、むらひ母の娘の教を

見ても、ア、ト、の、を、き、て

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様



下級客

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち

左様

お玉の氣を

報らち





新門

二

【さ】かろから受て前後が解りまゝか玉らん那の身がらの
 此婦人ごありませんが幸ひは支配人由かおであれは打明

かろが宜さるふあもの膝も法合でありませうト
 流石に新門元とんごころが實に當然と和平次ハ
 久次郎ふち對ひか咄のかりむさで婦人ハ
 金子で自由ある幹の様と思つてはは
 貴君ハ如何の思しめし承り

さしそは相儀の
 紋の方もさう
 させうそれふ又
 夕人どもが如あは
 来るとられは只今ふも
 とありませう此方の



いふ娼妓を
 妓不別流ハ
 とて立流ふ云
 口もさう干ぬ處
 蘆藏ハ

此決着次第ふ依りそれとありま
 應接の段の方もせねばあらざト
 のと新門はあまも十二那奴門ハ
 来と見せられまて在り
 さしそは
 れすも由
 咄し何れも
 お玉らん那の



あれはりりゝあがら
 面目多げハ
 そのお玉
 とりて女ハ
 西内の
 長屋
 小



ある事故と日暮客で来る

見察
助藏
自分(利)とらふとて
収元(相)候ふなり

義理の
あて不考の
子とある
由心から
無縁と察
しこれい吾
の方から
か玉の為あれど
引くもせぬ義
理引くもせぬみ
れん不愚圖(日)せ
送つて果(次)

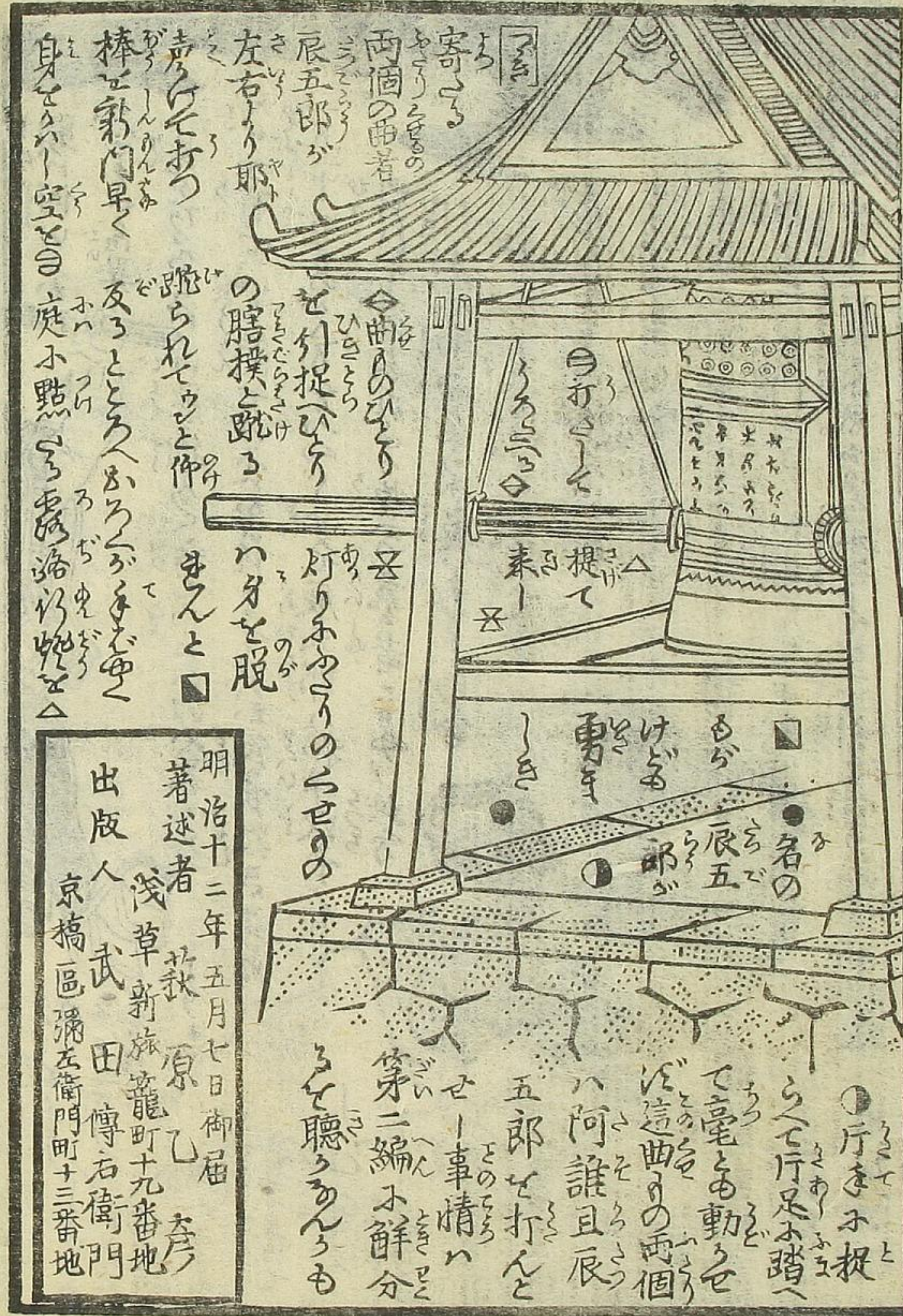


新日

掛り力ふ及ばぬ無理を
とせし一瞬の親父の立腹
母の言方(方)も
面目さい(只)れ
とづれ(年)期
の明のせ
待(ち)ふ
吾も又内汁の金の百や二百ハ
融通の出来(辨)ふ
躬(成)る(う)ら短気(起)
さだ末の極(下)互(い)不約束

人(来)る(う)らあてか玉が

あてか玉が
氣を採む
い正を悔え
今(由)
貪(之)
助藏の
方(行)
ば(ま)ぐ
西(親)ハ
ふ(あ)れ



明治十二年五月七日御届
 著述者 浅草新旅籠町十九番地 原乙彦
 出版人 武田傳右衛門
 京橋區彌左衛門町十三番地

開明 小説 春雨文庫 四編ヨリ引續出版

花のなまじり
 處女香白
 大島屋傳右衛門
 一冊 廿五錢
 二冊 三錢

此の物語は、花のなまじり、世間毒殺の列、
 けいこ、精製の上、あつり、あつり、あつり、
 つや、あつり、あつり、あつり、あつり、
 のち、あつり、あつり、あつり、あつり、
 此の物語は、あつり、あつり、あつり、あつり、
 文栄堂記

明治十二年五月
 浅草區三好町七番地
 大川屋錠 吉合梓
 京橋區彌左衛門町十三番地
 大島屋傳右衛門



宝印